

小さい頃私は、よく祖母と一緒に墓参りに行きました。私はお墓に着くと、線香を点け、花やお供え物をし、手を合わせすぐ帰ろうとしました。しかし、祖母と一緒にのお墓参りは、とても時間がかかりました。祖母はお墓への行き帰りの道を、ゆっくりと楽しんでいくように見えました。お墓に着いてからも拝んで終わりではなく、途中で草取りを始めた、腰を伸ばして休憩したりしていました。「昔の人はなあ、暗くなるまでお墓参りしたられた。あれは、お墓で何か語っておられたかもしれんね」と言いました。

しかし、成長するにしたがつて、私はなかなか祖母のところに行かなくなりました。そして元気だった祖母も、やがて病気がちとなり入院することが多くなりました。祖母が亡くなる半年前お見舞いに行った私に、「これで飴でも買いなさい」と、手の中でくしゃくしゃになった千円札を二枚渡してくれました。あんなにくしゃくしゃだったのは、私が来ることをずっと待っていて、手に握りしめていたから。私はそう思えて、なんだか後ろめたい気持ちになりました。

でも祖母は私に、「足が痛くて、もう墓参りには行けんわ。手も痛くて合掌がうまくできん。ごめんだけど、いつでもいいけん代わりに墓参りしてごさなかね」と言ってきたのです。本当は合掌したいのに、できなくなった手。本当は墓参りしたいのに、できなくなった小さな体。そんな祖母を見て、一緒にお墓参りした日のことが、まるで昨日のように思い出されました。そして、その祖母の姿そのものが供養をすることの尊さを表している、そんな風に感じました。

私は、祖母から生老病死の全てを、学んだように思います。元気な時は、長い時間をかけてお墓参りをし、年をとりやがて病になり、療養生活を経て天寿を全うした祖母。私が僧侶として人に伝えている供養の大切さは、他でもない祖母から受け継いだ教えです。今、祖母に伝えたい言葉がたくさんあります。そして祖母から教わった供養の心を、これから多くの人に伝えていきたいと思えます。